慈悲あまねく慈悲深いアッラーの御名において

（1）ラーイラーハイッラッラー
　イスラームの信仰は、ラーイラーハイッラッラーに始まり、ラーイラーハイッラッラーに終わります。
　ラーイラーハイッラッラーとは、「アッラーのほかに神はない」という意味です。
　「アッラー」とは、たくさんいる神々のうち、イスラム教徒と呼ばれる人たちが崇める神の名ではありません。アッラーとは、私たちと、私たちを取り巻くすべてを創った方の名です。つまり、アッラーとは、私たちすべての存在の大元をつくり、そして、私たちすべての今、ここの存在を支えてくださっている方のことです。
　そのアッラーのほかに神はない、とは、この世界を創造し、それを維持する力と英知を備えたアッラーのほかには私たちの拠り所となるものはない、ということです。

（2）絶体絶命の窮地を救うのは
　アラビア半島に預言者ムハンマド（彼にアッラーの祝福と平安あれ）が使徒として遣わされた当時、今から１４００年ほど前のアラブ人は、木や石などの偶像を部族神として崇拝していました。
　彼らは、自分たちの創造主がアッラーであることを知っていましたが、アッラーと自分たちの間を執り成す仲介者として先祖伝来の部族神を、なぜそれを神として祭るのか深く考えることもなく崇拝を捧げていたのです。
　クルアーンの中で、アッラーは彼らについて仰せられています。もし、彼らが海で大嵐に会ったなら、日々供物を捧げるそうした神々を打ち捨ててアッラーに一心に助けを求めるではないか、そのくせ、一旦、無事に陸にたどり着くや、アッラーに祈ったことなどなかったかのように、また偶像崇拝に戻るのである（第 29 章 65 節、cf.第 10 章 12 節）。
　神とは、まさに絶体絶命の窮地にあって私たちが、「神さま！」と呼びかける、一切の限定なしの方です。縁結びの神さま、山の神さま、氏神様といったものが仮にいたとしても、彼らには絶体絶命の窮地を救う力はありません。そして、それらを祭っている当人たちもそのことは実はわかっているのです。

（3）神とは私たちの拠り所
　樹齢数百年の大木に不思議な力が宿っていたり、病気を治したり、未来を予知するなど特殊な能力を持った人は確かにいます。でも、だからといって、その木やその人を「神」として崇敬することは間違っています。日本人は昔からそうした尋常でない力を持ったものを「カミ」と呼んできましたが、「アッラーのほかに神はない」と言ったときの「神」とは、私たちの存在を支える拠り所のことだからです。私たちが日々その恩恵を間近で感じる太陽をつくり、私たちがその存在をほとんど意識しないものの、それなしには一時も生きられない空気を備え、その他諸々、私たちに必要なものすべて、また、必要ではないけれども私たちの生活を豊かで喜びの多いものとするすべてをつくった方、大木に不思議な力を宿らせ、一部の人に不思議な能力を授けた方こそ、神として崇拝を捧げられるべきであり、拠り所とするに値する方なのです。

（4）人は神に仕えるためにつくられた
「アッラーのほかに神はない」とは、単に宗教的な意味で崇拝の対象となる方はアッラーのほかにはいない、ということではありません。なぜなら、なんらかの宗教を信じている人だけでなく、無宗教、無神論の人もまた、自分の「神」を持っているからです。生きる支え、生きが

い、というふうに言い換えてもいいかもしれません。
　人は誰も、「神」なしには生きえません。なぜなら、人はそもそも「神に仕える」ように作られているからです。クルアーンの中でアッラーは仰せられました、『われがジン（妖霊）と人間を作ったのは、われに仕えさせるためにほかならない』（第51章56節）。
神に仕えるという性向を植えつけられた私たちは、アッラーという正しい崇拝対象を得ないと、その代わりとなるものを他に求め、例えば、恋人、子供、会社、国家、芸術、思想、あるいは富、名誉などを「神」とし、それに仕えます。多神教とは、なにも木や石の神々を崇拝することばかりでなく、そうしたものに自己の存在を過度に依存させることもまた、多神教なのです。それらを「神」とする者は必ず裏切られます。なぜなら、それらは、どんなに揺らぎない価値を持っているように見えても、しょせん有限であり、それゆえ変化と消滅を免れ得ないからです。

（５）欲望という名の神
　ものであれ、人であれ、なんらかのものに自分の存在を過度に依存させるなら、それもまた多神教だといいましたが、もう１つ、さらにやっかいなものを私たちの多くは「神」としています。それは、「私」です。クルアーンの中でアッラーは、『おまえは己の欲望を神とするものを見たか』（第25章43節、第45章23節）と仰せられています。
外に一切の「神」を持たない者は、自分自身を神とし、自分の欲望の声をまさに至上命令としてそれに聞き従うようになります。自分では自分こそが欲望の主のつもりでしょうが、欲望の声に突き動かされ、なりふり構わずその望むところを実現しようとするなら、私は私自身の欲望を神とし、それにしもべとしてかしずいているにほかならないのです。
この多神教のやっかいなところは、自分が多神教に陥っていることに気づきにくいことです。そのため、無神論者ばかりか、信仰者ですら、知らず知らずのうちにこの多神崇拝を犯していることがあるのです。「アッラーのほかに神はいない」ということを知っていながら、アッラーの命令よりも己の欲望の声を優先させるなら、それは、アッラーと並べて己の欲望を神とし、その欲望の神に聞き従ったということになるからです。

（６）神のしもべであること
外から見るとイスラム教徒は、様々な戒律や義務を課せられて非常に窮屈で不自由に見えるかもしれません。が、実際のイスラム教徒、つまり、ムスリムは大きな解放感の中に生きています。なぜなら、彼らはアッラーという絶対権威のほかには何にも従う必要がないことを知っているからです。ですから、普通の人がその制約の中で生きる社会規範、しきたり、常識、流行に縛られ、振り回される必要がないのです。世間体や人目を気にすることもありません。アッラーによって定められた規範・礼節を守ることだけに気を使い、アッラーに喜ばれることだけを考えればいいのです。「ラーイラーハイッラッラー（アッラーのほかに神はない）」とは、人をあらゆる隷属から解放する言葉なのです。
　アッラーはこの世界のすべてを人間のために創り給いました。そして、人間を彼ご自身のために、彼のみに仕えるようにと創り給いました。ですから、人間が自分たちのために創られたものの虜となり、それらに仕えるのは自らに不正をなすことに等しいものです。アッラーは人間を「わがしもべ」、つまり、御自身のものと呼ぶことによって人間に栄誉を与えてくださっているのです。

（７）ジン
　木の神、山の神と日本人が呼ぶものは「アッラーのほかに神はない」と言った時の「神」で

はありえない、と言いましたが、それは、日本人が「木の神」、「山の神」などと呼んできたものをありもしないものと完全否定するものではありません。樹齢何百年の古木に宿る霊、あるいは、木そのものの魂が人間に語りかけたり、人間になんらかの作用を及ぼすということはありえないことではありません。

アッラーはこの世に、人間のほかに「ジン」という知的能力と自由意志を持った霊的な存在を創り給いました。彼らは、人間の目には見えませんが、人間と生活空間を共有し、人間と同じような営みをしています。ジンの中には悪いジンやいたずら好きのジンがいて、大木に住み着いたり、人気のない山に住んで、通りがかりの人間に悪さをしかけることがあります。日本で言う、お狐さんにたぶらかされる、というのも、このジンの仕業と考えることができるでしょう。

（8）すべての被造物はムスリム

日本人は、動物だけでなく、植物、さらには石などの鉱物にも「仏性」がある、と言い、人間至上主義的な西洋キリスト教の自然観とは異なる世界観を持っていますが、クルアーンの中でアッラーは、人間だけでなくこの世のすべてがアッラーの命令に服す「ムスリム」であり、各々が各々の言葉でアッラーに賛美を捧げていると仰せられています。また、クルアーンにはアッラーを畏れて岩が割れたり、山が崩れるという話も出てきます。預言者ムハンマド（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の伝承の中にも、木が泣いたり、石が口を利いたりする話があります。

およそ「自然現象」と呼ばれるもので、自動的にものごとが展開しているものはありません。太陽が決まった時間に東から上り、決まった時間に西に沈むのも、天体が軌道に沿って移動するのも、雨が降り風が吹くのも、決まった季節になると花が咲くのも、みな、それらが日々刻々アッラーから命を受け、その命に従って動いているからです。ですから、自然の法則に反するような「奇跡」が起こることも、決してありえないことではありません。アッラーが海に「割れよ」と命じ給えば、海はその命令に服して2つに割れるのです。

（9）ムスリム

人間だけでなく、この世のすべてが「ムスリム」である、と言いましたが、「ムスリム」とは、アッラーに服したもの、という意味です。いわゆる「イスラム教徒」と呼ばれる人々をアラビア語では「ムスリム」と言うのですが、「ムスリム」の本来の意味は「服したもの」ですから、7世紀に始まった「イスラーム」という宗教の信奉者だけを指すものではありません。例えば、イブラーヒーム（アブラハム）は、ユダヤ教徒にとってもキリスト教徒にとっても神の預言者ですが、彼についてアッラーはクルアーンの中で、『彼はムスリムであった』（第3章67節）と仰せられています。また、人間だけでなく自然界に存在するものはすべて、軌道を進む天体も、動く雲も、咲く花も、みなアッラーの命に服したムスリムです。

イスラム教徒になるには、教義に関する知識は特に必要なく、入信の儀式もとりたててありません。アッラーのほかに神はなく、ムハンマドがアッラーの使徒であるという一点を認め、そのことを2人の証人の前で証言すればそれだけで十分です。イスラームの入信がなぜそれほど簡単かというと、人はみなムスリムに生まれついているからです。ただ、神に関する正しい知識を持たない両親の許に生まれ、間違った教育を受けたために、無神論者になったり、別の宗教を信仰するようになって、自分がムスリムであることを忘れているのです。ですから、イスラム教徒になる、というのは、一つの宗教から別の宗教に宗旨替えするということではなく、ただ、自分がムスリムであったことを思い出し、自分本来の居場所に戻ることです。

（１０）イスラーム
キリスト教だとか仏教だとかいう呼び名は後から他称として付けられた名ですが、「イスラーム」は、クルアーンの中でアッラーによって命名された宗教名です。『まことに、アッラーの御許における宗教はイスラームである』(第 3 章 19 節)、『イスラーム以外を宗教として求めた者、彼は彼（アッラー）から受け入れられることはなく、彼は来世では損失者のひとりである』（第 3 章 85 節）。
「イスラーム」とは、「身を委ねる、服す」という意味の動詞からの派生語で、「帰依」という仏教用語がまさに訳語としてぴったりです。先に引用したクルアーンの言葉も、狭い意味での「イスラム教」ではなく、「帰依」という意味で読むべきでしょう。つまり、およそ絶対者との関係としてありうべきは絶対帰依以外にはない、ということです。
アッラーは人間を「イスラーム」の天性の元に作り給いました。仮に、無人島でたった一人で暮らし、ムハンマドという預言者の名もクルアーンという啓示の書のことも知らなかったとしても、天性のイスラームに基づいて創造主を認め、彼に感謝と賛美を捧げ、謙虚に御心に従おうとするなら、その人は帰依した人、ムスリムなのです。

（１１）ラーイラーハイッラッラーと南無阿弥陀仏
「イスラーム」の訳語には「帰依」がぴったりだと言いましたが、「ラーイラーハイッラーッラー」が意味するところと「南無阿弥陀仏」が意味するところは、ほとんど同一です。アッラーのほかに拠り所はありません、というのと、阿弥陀様にただただおすがりするよりほかありません、というのは同じ絶対帰依と絶対他力の表明にほかならないからです。
イスラームは信仰者にさまざまな義務負荷を課す「自力的」な宗教であるという印象が強いかもしれませんが、実は、救済はそうした義務履行の代償として与えられるものではなく、ひとえにアッラーの御慈悲にかかっているのであり、善行をなす力、善行をなそうという意志自体アッラーからもたらされ、その外では何一つなし得ない、とする絶対他力の宗教です。
善をなすことすらあたわない弱い自分をありのままに阿弥陀に委ね、ただひたすらその御慈悲だけを頼りに、「南無阿弥陀仏」という御言葉の力にすがって彼が呼び招く極楽浄土を望む浄土真宗の信徒のあり方は、「ラーイラーハイッラッラー」の御言葉を救済の手がかりとして来世の楽園を目指すムスリムとなんら違いません。

（１２）アッラーという名
「アッラー」とは、イスラム教徒の信じる神の名ではありません。アッラーとはすべてを創った方の名で、すべての被造物の神です。アラブにはヨーロッパがキリスト教化するよりずっと以前からのキリスト教徒がいますが、アラビア語を母国語とする彼らにとっても神はアッラーです。アラビア語聖書を見ると、「テトスへの手紙」の冒頭でパウロは自分のことを「アブドッラー（アッラーのしもべ）」と呼んでいます。また、キリスト教よりもイスラームの伝来のほうが早かったインドネシアのキリスト教徒もまた神をアッラーと呼んでいます。
「アー」という音は、人間にとって最も発音し易い母音です。驚いて思わず発する声もまた「アー」でしょう。「アッーー」、人は驚愕したときに思わず知らずアッラーを呼んでいるのです。「ラー」も子音の中で最も発音しやすい音の１つでしょう。人間が彼を親しく呼び慣らせるようにアッラーは口に最も易しい音でご自分を名づけられたのです。
子供は一日に何度も何度も「おかあさん、おかあさん」と母親を呼びます。恋人も繰り返し繰り返し愛する人の名を呼びます。人が愛する者の名前をさしたる理由もなく連呼するのはただただ愛情表現にほかなりません。そして、ムスリムは、日に何十遍、何百遍となくアッラーの御名を口にするのです。

アッラーの名を呼ぶのは人間だけではありません。すべてのものが私たちには聞き取ることのできない言葉でアッラーを賛美しています。アッラーから特別の恩寵をいただいた信仰者の中には、体の血管が「アッラー、アッラー」と脈打つのを聞いたり、機械のモーターが「アッラー、アッラー」と音を立てるのを聞く人もいます。

（１３）サムシンググレートとアッラー

特定の宗教は持たなくても「神」の存在を信じている人は少なくありません。多くの人にとってその存在は「神」と名づけられてすらいないかもしれません。いずれにせよ、自分の存在の元を創り、自分の存在の今を支える大いなる力、つまり、「サムシンググレート」に対する畏怖と感謝の念を無信仰の人でも大なり小なり持っているはずです。日本人は行く先々の神社で手を合わせますが、その都度その神社に住まう個別の神さまに向かって祈っているわけではなく、はっきりと意識しないままにこの「サムシンググレート」に祈っているのではないでしょうか。

この「サムシンググレート」について私たち人類が思い描くイメージは民族を超えて一様です。それは必ず慈愛溢れた輝ける善なる存在であり、人類に「愛」や「平和」のメッセージを送っています。崇拝形式は異なっても、また、たとえ多神教であっても、この大元の神のイメージは一つです。しかし、その神のイメージは間違いではないものの、非常に不正確なものです。アッラーは、そのような漠然とした、私たちを包み込む空気のように不可欠だけれども存在感の薄いものではありません。また、そのような抽象的なメッセージを送るしか私たち人類とコミュニケーションの手段を持たない方でもありません。アッラーはもっと積極的に人間とかかわり、もっと具体的に人間に理解できる言葉で語り給うています。

（１４）創造主アッラー

アッラーは自然界の仕組みを整えてそこに人間を住まわせると、後は遠くに身を引いて自然が自動的に生命活動を展開し、人間がそこで好き勝手に営みを繰り広げるに任せ給うたのではありません。自然界に起こるどんな現象も「自然に」、つまりそれ自身の内的要因に基づいて自動的に起こっているわけではなく、一つ一つそこにはアッラーの御意志が介在しています。木の葉一枚とて、アッラーの知識の外で、アッラーの御許しなしに落ちることはないのです。私たちが毎朝いつものように目覚め、いつものように一日を始めることができるのもアッラーの御許しと恩恵のおかげです。アッラーが創造主であらせられるというのは、この世界の創始者であらせられるというだけのことを言うのではありません。アッラーは日々刻々の創造者であらせられるのです。
アッラーのことを拒絶した者をアラビア語で「カーフィル」と言いますが、この語は「覆う」という意味の動詞の派生語です。カーフィルとは、私たちの生命と営みを日々刻々支えてくださっているアッラーの恩恵に覆いをかけ、感謝しない者のことです。宗教などなくても人間はその善なる本性に従って清く正しく生きられる、と思うのは間違いです。殺人も盗みもせず、嘘もつかず人を裏切ることもなかったとしても、自分の存在が全面的に依存する恩恵の主に感謝を返さないとしたら、もうそれだけで十分罪深いのです。

（１５）創造

アッラーは６日で天地を創造し、そこに人間を住ませ給いましたが、そこで手を引き、「後は勝手にせよ」と放置し給うたわけではありません。
全能なるアッラーにとって無からの創造はいとも簡単なことです。「あれ」と一言命じ給えば、即座にそれはそこに出現します。そうやってアッラーはすべてのものを創り給いましたが、人

間は別でした。アッラーは最初の人間アーダムをまず土くれから創り、それからそこに御自身から魂を吹き込み給いました。そのように手をかけられたのは、アッラーにとって人間が特別な存在だったからです。そもそもアッラーが天地を創り給うたのも、色とりどりの花を咲かせて私たちの目を喜ばせ、おいしい実りで私たちの舌を楽しませる草木を生やし給うたのも、私たちが肉を食べ、乳を飲み、背に乗る家畜を私たちに従順なものとなし給うたのも、みな私たち、人間のためでした。
人間のために環境を整え、手間をかけて人間を創り給うたアッラーが、その後の人間の成り行きをそのままに放置されるはずがありません。私たちが何かを作るときには、まず目的があり、その目的・用途に応じて設計します。それから、設計通りにできあがった作品の出来上がりを見守り、維持・管理します。アッラーの手による「人間」という作品も同様です。

（１６）啓示の書
高度で複雑な機能を持った製品には必ず取扱説明書が付いています。製作者による取扱説明書を無視して勝手に動かそうとしても、製品はそれに付与された性能を十分には発揮できないでしょう。それはその製品にとって不幸なことです。人間もそうです。アッラーは人間を明確な目的と計画の下に作成し給いました。その目的に適った生き方をしてこそ人間の幸福は完成するのです。
エデンの園に永遠に幸福に暮らすという神のご計画は、最初の人間アーダムの神の禁忌を犯すという反逆行為によって狂わされ、その結果、人類は永遠の至福を手放し、地上の短く苦しみの多い生を甘受することになったのではありません。
アッラーは揺らぎないご計画に基づいてこの地上を人間の短い間の住処として作り給いました。アーダムが自らの手で地上の生活の第１歩を踏み出すきっかけを作ることも元からご計画のうちでした。ですから、アッラーは反逆行為をなして地上に下るアーダムを冷たく突き放し、遠くに身を引くようなことはなさいませんでした。むしろ、ご計画に従って、どうしたらアーダムとその子たちが地上で設計者自らがインプットした本来の目的に適った幸福な生き方ができるかをお示しくださいました。人間という製品の取扱説明書、それが啓示の書です。

（１７）使徒
私たち人間にすばらしい言語能力を与えてくださったアッラーに、私たちとコミュニケーションを取る能力がないことがどうしてありえましょう。アッラーは、人間が御自身の定められた目的と計画に従って生き、そうすることによって幸福になるよう、事細かに指示を出し給うています。
アッラーは、アッラーの英知によって、この地上では個々の人間に直接語りかけるのではなく、何人かの選別した者たちを通してメッセージを送るようになさいました。それが、「預言者」です。イスラームでは、預言者の中でも特に人々全般に向けた普遍的なメッセージを預かった者を「使徒」と呼びます。そのようにアッラーが一部の者に限定して言葉をかけ給うた理由の一つは、人々が神からの御言葉を預かった指導者の下、愛の絆に結ばれて秩序と調和を築くためかもしれません。
神の御言葉を預かった人とはいえ人間ですから、いずれは老いて死にます。世代も移り変わり、預言者の記憶は薄れ、影響力も弱まります。時代が変われば、伝えるべき内容も変わるでしょう。そこで、アッラーは、時代時代に、その時代の人々に見合ったメッセージと共に新たな預言者を遣わし給いました。良く知られているところでは、イブラーヒーム（アブラハム）、ムーサー（モーセ）などがそうです。イーサー（イエス）もまた、預言者の一人でした。彼らの伝えるメッセージは、枝葉の部分では異なりこそすれ根幹では一つ、ただ創造主にのみ信仰を捧

げ、彼に感謝し、善行をなせ、いずれ人は己の行いの清算を受け、善行をなした信仰者は永遠の楽園によって報いられ、不信仰者は永遠の責め苦によって罰せられる、それだけでした。

（１８）最後の預言者

アッラーは時代時代に見合ったメッセージを新たな預言者に託し給うて来られましたが、それもアラブの預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）で終結しました。つまり、彼は最後の預言者です。なぜ彼で最後かというと、もうその後は新たに預言者を遣わす必要がないからです。それ以降は、どんなに時代が変わってもメッセージを更新する必要はなく、また、預言者ムハンマドの預言者としての働きは弱まることがないからです。
クルアーンの中でアッラーは仰せられました、『今日、われはおまえたちにおまえたちの宗教を完成し、おまえたちにわが恩恵を完了し、おまえたちにイスラームを宗教として満足した』（第5章3節）。創造主アッラーによって人類にもたらされた道しるべ、すなわち宗教はここに完成しました。以降、あらゆる土地のあらゆる時代の人々に向けられたその普遍的なメッセージは、それまでの預言者たちが携えて来た啓示の書が後世の人々の手による改ざんから免れ得なかったのと違って、アッラーの守護によってどんな追加もわずかな改変も加えられることなく今日まで啓示されたままを保って来ました。また、預言者ムハンマドにアッラーが預言者の証として授け給うた奇跡は、過去の預言者たちのそれとは異なり、時の流れの中で効力を失うものではありませんでした。海を割り、死人を生き返らせる奇跡は、言ってみればその場限りの奇跡です。時が移り、場所が変われば、奇跡としての効力は薄れます。しかし、預言者ムハンマドに授けられた奇跡は、時を越え、場所を越え、変わらず奇跡であり続けるものでした。新たな預言者がやって来て新たな奇跡を起こして見せる必要がないのはそのためです。

（１９）奇跡の書クルアーン　１

預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）に授けられた、時を越え、場所を越えた奇跡とは、彼に啓示されたクルアーンのことです。
「クルアーン」とは、「カラア（読む）」という動詞からの派生語で、「読まれるべきもの」というような意味です。ここで言う「読む」とは、黙読のことではなく、音読です。クルアーンをクルアーンならしめているものは、その内容だけでなく、その音です。クルアーンが翻訳不可能だといわれるのも、かりに内容を別の言語に置き換えることができたとしても、音まで移し変えることはできないからです。
クルアーンは、アッラーから命を受けた大天使ジブリール（ガブリエル）を通して預言者ムハンマドにアラビア語で逐語的に啓示されました。つまり、一字一句、いえ、一音一音口移しで伝えられたのです。
啓示の最初の言葉は、「読め」でした。読め、といってもなにか書かれたものを判読せよ、ということではなく（そもそも預言者ムハンマドは文盲でした）、ジブリールが口述するものをそのままに繰り返して言うように求められたのでした。そこには、日常のアラビア語ではなされることのない音の引き伸ばしや鼻音など特殊な節回しのようなものが用いられていました。また、中には意味不明の音の羅列もありました。預言者ムハンマドは言われるがままにそれを忠実に繰り返し、記憶されました。そして、その独特な読みまわしはムスリムの間で今日まで忠実に教え伝えられてきました。そのため、ムスリムは、預言者ムハンマドがジブリールから啓示されたままのクルアーン読誦を今も再現することが可能です。つまり、それによって、今この場で神が語るという奇跡を追体験することができるのです。預言者ムハンマドの後には新たな奇跡が不要だというのはそのためです。

（２０）奇跡の書クルアーン　２
クルアーンの特異性を際立たせるため、ここで少しクルアーンと新約聖書を比較してみましょう。
新約聖書は、複数の筆者が綴った記録と書簡から構成されています。
イエスの言行を記録した福音書はその場に立ち会ったか、立ち会った者から伝え聞いたと想定される者によって書き留められ編纂された部分的な採録です。ついでながら、新約聖書の福音書はイエスが用いられた日常語のアラム語によるものではなく、ギリシャ語によって書かれています。
新約聖書にはところどころで「私」という一人称が出てきますが、それぞれの筆者が用いたものです。つまり、新約聖書には、「私」と語る複数の筆者がいる、ということです。一方、クルアーンに用いられる一人称は、アッラーおひとりによるものです。聖書は神の霊感を受けた者によって書かれたというのがクリスチャンによる聖書の位置づけですが、クルアーンに筆者はなく、預言者ムハンマドは天使ジブリールから口移しされた神の御言葉の記録・伝達者にすぎないのです。
もしクルアーンが山に下されていたら、山は恐れおののいて崩れ落ちただろうとクルアーンの一節は言っています（第５９章［集合］２１節)。ムスリムは、神の語り給うた言葉を口にする礼節として、クルアーン読誦の前には礼拝前の身支度と同じように水で身を清めます。

（２１）すべての人類への導きの書クルアーン
アラブの預言者ムハンマドにアラビア語で啓示されたクルアーンですが、それは決してアラブ人だけに向けられたものではありません。そこには、時代を越え、民族を越えた普遍的なメッセージが込められています。
アッラーは人類を一つの言語を語る単一の民族とはなさらず、肌の色や髪の色も異なれば、話す言葉も様々に異なる多民族になし給いました。それは、違う者同士が、そうした相違を通して互いを知り合うためでした（第４９章［部屋］１３節)。その上で、アッラーは、クルアーンの言語アラビア語を彼らの間の共通語となし給いました。それでムスリムは世界中どの地にあろうと「アッサラームアライクム(あなたがたの上に平安がありますように)」というアラビア語で挨拶を交わし、何語を母国語にしようと共通の言葉で礼拝を捧げるのです。なお、楽園の住民の語る言語はアラビア語であると言われています。
アッラーがなぜ最後の預言者をアラビア半島に遣わし、なぜ最後の啓示をアラビア語で下し給うたのか、そしてまた、なぜムスリムはアラビア語で礼拝を捧げなければならないのか、それは私たちには知りえないアッラーの英知によるものですが、世界中のムスリムが一同に一つの言葉で一つの方向に向かって礼拝を捧げ、額づくことほど神の唯一性を美しく体現するものはないのではないでしょうか。

（２２）天使
アッラーは預言者モーセ（ムーサー）には直接言葉をかけられましたが、通常は大天使ジブリール（ガブリエル）を通して啓示を下し給いました。アッラーにはジブリールのほかにもアッラーのお側でアッラーに仕え、アッラーのご命令に応じて任務を果たす様々な天使たちがいます。例えば、私たちの肉体から魂を取り上げるのも天使の仕事です。また、私たちの両肩には二人の天使が控え、私たちのなすこと、言うことを逐一記録しようと構えています（第５０章１７、１８節)。雨の一粒一粒をアッラーのご命令によって指定された場所に運ぶのも天使です。天使は私たちの目に見えない姿で私たちの加勢をしてくれることもあれば、人間の姿を取って私たちの前に現れることもまれにあります。

天使は休むことなくアッラーを賛美し、アッラーのご命令を果たすために忙しく立ち働き、賛美に倦むことはなく、ご命令に背くこともありません。つまり、天使は完全無欠の存在です。アッラーはその天使たちに対して、欠陥だらけの人間に向かって跪拝するように命じ給いました。アッラーは、服従よりなしえない天使よりも、服従と反逆の選択肢を与えられ、悪の誘惑に傾く弱さを抱えながらも自分の意志でそれを乗り越えてアッラーの命に服そうとする人間に栄誉を与えてくださったのです。

（２３）死とその先にあるもの
私たちは誰もが死すべきものであり、死すべきものであることを知っています。
また、私たちの命に限りがあるように、この地球にも限りがあります。始めのあるものは、すべていずれ終わりを迎えます。私たちが絶滅の危機に瀕した希少動物の保護に努め、歴史的遺跡や自然を世界遺産として残そうとしても、あるいは、家の血統と伝統を絶やすまいと世継ぎを画策しても、いずれそうした努力は無に帰し、すべてが消滅する日は来ます。しかし、それは終わりの日であると同時に、始まりの日です。
私たちはそれぞれに予め定められた寿命に従って遅かれ早かれ死ぬ日を迎えますが、それはこの世からの卒業にすぎず、私の生は別の次元においてさらに続きます。この世を離れると同時に地球の住民が身を置く時間枠から解放された私は、一瞬とも限りなく長い年月とも言える時を経た後、地上に存在したすべての人間が一斉に甦り、そろってアッラーの前に立つ日を迎えます。そして、アッラーの裁定に従って永遠の楽園、または、火獄を住処とすることになります。天に輝く太陽と月が消滅し、したがって今私たちが数える月日が無意味となった新たな地で、この現世でのたかだか１００年の生などまるで一瞬ほどの長さに思えるほど長い長い時間を私たちは喜びの中で、あるいは苦しみの中でずっと生き続けることになるのです。

（２４）生という試験と死後の清算
いったい、自分の存在とはなにか。私たちはなぜ生を受け、なぜ死ぬのか。どこから来て、どこに行くのか。人間はずっとこの疑問をめぐって哲学的思弁を重ねてきましたが、人間を創り、人間に生死を付与し給うたアッラーのほかにどうしてその答えを知りえましょう。クルアーンの中でアッラーは、人間を死ぬべきものとして創った理由を次のように説明しておられます、『彼は、おまえたちのうちいずれが行いにおいて優れているか、おまえたちを試みるために死と生を創り給うた』（第６７章［王権］２節）。
私たちのこの世の人生は、やりっぱなしの人生ではありません。それは、例えるなら、「試験」のようなものです。そして、どんな試験にも制限時間があり、その後には採点が待っているように、私たちの人生も、死の終止符を打った後にアッラーの御前で清算を受けます。そして、その結果、楽園、あるいは火獄に入れられます。
この世の生を終えた後、アッラーの審判を経て永遠の楽園か火獄に選別されるのは、アッラーに従うか従わないか、自分の意志による選択肢を与えられた人間（とジン）だけで、選択の余地なくアッラーに服しているその他の生き物に「来世」はありません。
すべてを見通すアッラーには、私たちを「試験」にかける必要はないのですが、私たち一人一人が自分の判定結果に納得するよう、わざわざ試験し、さらに審判に立ち合わせ給うのです。
アッラーがどれほど公正な御方であるかを示す１つの伝承があります。それによると、アッラーは、角のある鹿とそれに小突かれた角のない鹿を審判の日にいったん甦らせ、一方に生前に受けた仕打ちと同じものを他方に対してやり返させた後、両者を土に戻されるということです。このようにアッラーはどんな小さな不正も、人間の間だけでなく、動物の間ですら清算なさいます。ただし、その後に永遠の生が待っているのは人間だけで、動物は再び土に戻され、完全

な無に帰ります。それで、火獄の永遠の懲罰に向かう不信仰者たちは、「ああ、われらも土のままであったらよかったのに」と来世での「不死」を嘆くのです（第７８章［消息］４０節）。

（２５）審判

審判の日、墓から甦らされた人間はアッラーの御前に引き立てられ、過去の行いの一つ一つを記録映画を見せられるように目の前に見せ付けられ、「おまえは、いついつ、どこそこで、これこれのことをやったな」と問い正されます。否定しようにも口は利けず、その上、手足は自分に不利なことまで洗いざらい証言するでしょう。
その日、良い行いには良い報いが、悪い行いには悪い報いがあります。アッラーはたいへん慈悲深い御方なので、私たちの善行と悪行を計る秤は私たちに不均衡なまでに有利です。例えば、１回の善行には１０点の得点が加算されますが、１回の悪行には１点の減点のみです。そればかりか、善行は行為の大小ではなく、その行為の裏にある意図の大小によってはさらに７００倍、あるいはそれ以上に倍加されます。また、なそうとしたものの果たせなかったことにも、１点の善行点が付きます。過去になした悪行は、その後で善行を重ねれば、マイナス点が帳消しになるばかりか、プラス点に加算されることにもなります。こうして、寛大なアッラーは、できの悪い人間たちでもなんとか合格ラインに達せられるよういろいろ下駄を履かせてくださるのです。

（２６）死を与えるもの

この世に存在するものの生死を決めるのはアッラーのほかにありません。アッラーの９９の御名の中に、「生かす御方」と「死なす御方」という名がある通りです。クルアーンの中に、王権を授けられ思い上がった王が、自分こそが生かし、また、死なせる者である、と主張したという逸話が出てきます（第２章［雌牛］２５８節）が、いつの時代も権力を手にした者は支配下のものの殺生権は自分の手に委ねられているという錯覚に陥るものです。それはなにも、かの暴君、かの独裁者のことばかりを言うのではありません。人間自体、思い上がって、他の生き物の殺生権を握っていると勘違いし、生存のためならまだしも、止まるところを知らない食欲を満たすために生き物をまるで物のように飼育し、まるで物を処理するように殺しています。
ムスリムには豚肉の食用が禁じられますが、その他の食用を許された牛、羊、鳥などの食用動物も、アッラーの御名を唱え、「アッラーフアクバル」と言う言葉を添えて殺されたもの以外、基本的に口にはしません。なぜなら、生き物の殺生権はそれらを創ったアッラーの御手にあり、それを勝手に無許可で殺すことは許されないからです。ムスリムは、実りを収穫する時、食べ物を口にする時、その他諸々の行為を始めるにあたって、「ビスミッラー（アッラーの御名において）」という言葉と共に始めるよう心がけますが、これは、私たちの命を支えるあらゆるものがアッラーからの恵みであることをその都度思い起こすためです。
なぜ自殺はいけないのか、なぜ人を殺してはいけないのか、そんな基本的なことに対する答えも現代人は失っているようですが、ムスリムにとってその答えは単純明快です。自分の命であろうと他人の命であろうと、およそこの世に生を受けたものの命は、それを与え給うたアッラー以外に取り上げる権利はない、ただそれだけのことです。
ちなみに、自ら命を絶った者は、それによって生き地獄の苦しみから解放されると思うのはとんだ間違いで、本物の火獄で繰り返し繰り返しその自殺の苦しみを味わうはめになるそうです。

（２７）楽園

来世の私たちの行く末は２通りです。アッラーを信じた者は、己の罪を火獄で清めた後、あるいは、アッラーの御慈悲によって懲罰を免じられた後、「平安あれ」と言う挨拶と共に楽園に迎

え入れられます。緑滴る楽園は、願望の具象化、永遠の至福の比喩表現などではなく、甦って不死の肉体を与えられた者たちの実際の住まいです。清らかな泉が流れ、色とりどりの果樹が実り、鳥が飛び交う楽園の中に壮大な住居を与えられた彼らは、望むものをなんでも与えられます。クルアーンは、楽園に対する私たちの希求を煽るためにそこがどんなに素晴らしいところか様々な描写を重ねて示していますが、しょせん、それらは私たちの想像力が及ぶだけのものにすぎず、実際の楽園はそれを遥かに越えた、まさに想像を絶するところです。
楽園の住民にはもはや悲しみも不安もなく、不和も不当な扱いもありません。みなが１つの心のようになって平安の中にくつろぎます。望むものはなんでも手に入ります。おいしい食べ物もおいしい飲み物も、なんの努力も要せず手を伸ばせばそこにあります。しかし、物理的な至福はほんの序の口の喜びにすぎません。楽園の住民にとって最大の喜びは、彼らの主アッラーの御満悦を得ること、そして、見えないままに仕えてきた愛する御方に拝謁することです。その喜びは、楽園の素晴らしい光景すら忘れ去るほどのものに違いありません。クルアーンに、『己の主の拝謁を希求する者は、彼の崇拝になにものをも並び置いてはならない』(第１８章[洞窟] １１０節) とありますが、アッラーとの拝謁を望む信仰者は、地上の恵みであろうと天上の報いであろうと、それがアッラーからもたらされるものであろうとも、それに気を取られてアッラーから目を逸らすようなことがあってはならないのです。

（２８）火獄
アッラーを信じさえすれば、それだけで楽園入りが保証されるわけではありません。信仰には、信仰を具現する行いが伴われなければなりません。たとえ、アッラーを信じていても、アッラーに背いた行いをした者は（アッラーの恩寵によって赦されれば別ですが）その清算を火獄の中でしてからでなければ、楽園には入れません。また、アッラーを否定した者は、たとえどんな善行を積んでいようと、火獄に落とされ、決してそこから出されることはないでしょう。
楽園の報いが、それぞれの行いに応じて様々であるように、火獄の懲罰も、罪の程度に応じて多様です。私たちは、燃え盛る火に一瞬でも触れることを恐れますが、火獄の火は私たちの知っている火の７倍も熱いと言われます。火獄に落とされた者は、一瞬でも耐え難いこの世の火よりさらに７倍熱い火獄の火に果てしなく焼かれ続けます。この世の火であれば、耐え難い数分を過ぎれば、皮膚は焼けただれ、感覚はなくなり、死によって苦しみから解かれますが、火獄の苦しみに終わりはありません。皮膚は何度も何度も再生し、火は不死となった身を永遠に焼き続けるのです。
「もし楽園に入るのがたった一人で、残りの者はみな火獄行きだとしたら、自分こそが楽園に入る一人であると期待するだろう。だが、もし火獄に入るのがたった一人で、残りの者はみな楽園に行くのだとしたら、自分がその火獄に落とされる一人であると思うであろう」という言葉をある敬虔なムスリムが言ったと伝えられますが、信仰深いムスリムは、信仰を深めれば深めるほど、自分が火獄行きではないだろうかという恐れもまた深めるものです。アッラーよ、どうか私たちを火獄の懲罰からお護りください。

（２９）定命
ムスリムは、自分に降りかかるものはすべて予めアッラーによって自分の分け前として振り当てられていたものだと信じます。ちょっとタイミングを外したばかりに自分のものとなるはずの幸運が手をすり抜けてしまったり、運悪く人の不幸を被ってしまうようなことはないと知っています。ですから、幸運を過度に喜んだり、不幸を過度に悲しんだりすることはありません。
なにが災いし、なにが幸いするのか、すべてが終わってみないことには私たちにはわからないのです。災いと見えたものが後の幸福につながり、逆に幸運と思えたものが後の災いの始まり

だということも十分あり得ます。いずれにせよ、アッラーの手の元にあるものはすべて良いものばかり、私のためになるものばかりです。そう信じることのできるムスリムの心は穏やかです。明日の不安から解放されています。昨日の後悔も引きずりません。
預言者ムハンマド（彼にアッラーの祝福と平安あれ）は、「もし、あのとき、ああしていたら・・・」などとは言わないように、「もしも・・・」という言葉は、シャイターンに仕事を与えることになる、と言っておられます。起こってしまったことは起こってしまったこと、そのことをくよくよ思い悩むことは、アッラーの決定に不満を呈することに通じるからです。
すべてはアッラーの定めに従って起こるべくして起き、偶然と思えることも偶然ではありません。すべてはすでに決まっていると知ったムスリムは、岐路に立ってどちらの道を選ぶか迷いますが、どちらの道を選んだとしても、そして、たとえそれが間違った選択だったと後から気づくことになったとしても、自分はそれを選ぶべくして選んだのだ、とその選択の結果をそっくり引き受け、そこから自分の明日を切り開いていこうとします。

（３０）すべてを受け入れるところから始まる

　すべてはアッラーによって予め決められているということは、私がこのような顔をし、このような能力で、このような思いを持つこともみな、私がそれに満足しようとしまいと、初めからなんらかの理由でアッラーに定められたことだということです。そうであれば、自分の不細工さも、不器用さも、不甲斐なさもみな、誰を恨むことでもなく、ありのままに受け入れるしかないと覚悟が決まります。
私たちの人生は、ちょうど障害物競走のようなものです。カモシカのような軽やかな足を与えられ、飛ぶように走る者もあれば、重い荷を背負わされ、一歩進む度に苦しい息を吐かなければならない者もあるでしょう。勝負は、誰が早くゴールに達するかで決まるものではありません。負わされた障害物を抱えて、いかに前に進むか、その姿勢が問われるのです。ですから、人がどれほど早くどれだけ先に進もうと、自分には関係のないことです。初めから負わされたものが違うのですから、人と比べてみても仕方ありません。多くを与えられた人にはそれだけ多くの義務が負わされるでしょうし、与えられなかった人は、与えられない、という恵みを与えられているのです。追い抜くべき相手は昨日の自分であり、要はアッラーから与えられた自分だけの課題にどう立ち向かうかです。
アッラーがこの私をこのように創られたのだ、そこにアッラーの愛を感じることができた者は、ありのままの自分を愛するようになるでしょう。そして、どんなに不甲斐なくても、たとえ躓いて痛い思いをしても、ただ今の自分から目を逸らさず、また、それを甘やかすことなく、自分をこのように創り給うたアッラーへの信頼という確かな足場に立って、明日のより良い自分に出会うために新たな一歩を踏み出すことができるでしょう。

皆さんに、アッラーへの信仰に目覚める日が来ますようお祈りします。

２００７．３．３